

機関番号：17102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720121

研究課題名（和文） 構文論的観点から見た語形成の歴史的研究

研究課題名（英文） A historical study of word formation from a syntactic perspective

研究代表者

青木 博史 (AOKI Hirofumi)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：90315929

研究成果の概要（和文）：

研究期間内においては、派生および複合を中心とした語形成に関するいくつかの重要な現象について、歴史的観点から記述した。従来の形態論・語彙論の枠組みにとらわれず、統語論的・構文論的観点からの分析をできるだけ多く行った。記述にあたっては、古典語における単なる共時的な分析にとどまることなく、歴史的変化をダイナミックに捉えることを試みた。こうした研究成果については、著書を含めた数点を発表した。

研究成果の概要（英文）：

The aim of this research is to investigate the historical change of Japanese word formation. I performed the analysis from a syntactic perspective as much as possible without being seized with a framework of conventional morphology/lexicography. I explained that a dynamic picture will emerge regarding the evolution of Japanese grammar which will reveal the roots of contemporary varieties of Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：日本語史

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：語形成，日本語文法史

## 1. 研究開始当初の背景

歴史的観点からの語形成に関する研究は古くから多くの蓄積があり、豊富な用例に基づいた実証的な研究として非常に意義深い。しかし、上代あるいは中古といった一時代における実態を、語構成論の観点から分析されるにとどまっている感は否めない。

その一方で、現代語を対象とした語形成に関する研究があり、そこでは理論的観点から

の優れた分析が数多く見られる。このような現代語のデータや分析は、歴史的な研究に大いに活かしていく必要があるが、そのような研究はほとんど行われていない。ここに、実証的研究と理論的研究のバランスのとれた研究が求められている。

## 2. 研究の目的

本研究は、上記の背景をふまえ、語形成論

の立場から文法現象を動的に描くことで、これらの成果を発展的に継承していくものである。ある特定の時代の観察・記述というレベルにとどまらず、現代語とのつながりを意識しながら「言語変化」としてダイナミックに描くことによって、文法現象の本質に迫ることを目的とする。

また同時に、言語事象が文献資料の性格とどのように関係しているのか考慮した、言語研究と一体となった文献学的研究を行っていく。さらに、文献資料によって仮設された歴史を、方言との対照によって相対化することを試みる。このような、方言と文献の両面を視野に収めることによって、豊かな言語史を描くことを目的とする。

### 3. 研究の方法

従来の形態論の枠組みに基づいた「語」レベルでの分析にとどまらず、「句」「節」レベルを視野に入れた分析、文中での統語的機能を考慮した分析を試みる。このような方法論に基づき、言語の構造に基づいた分析結果を呈示することを試みる。

記述にあたっては、用例に基づいた実証的な研究に加え、現代語研究で発達した理論的研究も視野に入れて行う。これは、単に現代語の枠組みを古典語にあてはめるということではなく、古典語の分析によって現代語研究の成果を検証するということでもある。必要に応じて、現代語研究と古典語研究の対照研究という方法をも用いるものとする。

### 4. 研究成果

(1) 補助動詞形式「～オル」は、現在西日本方言におけるアスペクト形式として広く用いられる一方で、関西方言では卑語的に用いられている。現代語におけるこのような振る舞いについて、歴史的観点から説明することを試みた。

室町期における抄物資料を観察すると、「～オル」が文法的な形式として用いられていることが見てとれる。したがって、西日本で文法的な形式として用いられる「～ヨル」はこれと直接的につながっていると考えられる。また、関西で卑語化するのはいずれのことであることも自然に導かれる。重要なのは卑語化するメカニズムであるが、これは標準語において発達した「～テイル」との接触によるものと考えられる。文法体系から追い出されたことで、特殊な表現価値を担うものとして生き残ったと考えられる。

このような成果は、文献資料を歴史的に並べただけでは得ることができない。資料の背後にある「言語」を見据え、その多様性を視座に収めたものとして重要である。また、関西方言の卑語的性格については、社会言語学の分野においても言及されている。日本語文

法史の分野のみならず、文献学や言語地理学、社会言語学など隣接する諸分野に対しても、重要なインパクトを与えるものである。

(2) 対人配慮という「機能」からアプローチする方法論が、歴史的研究においてどれだけ有効にはたらくかを検証する試みを行った。古典語を対象とする場合、残された文献資料に依存せざるをえないため、表現体系の記述にはなかなか至ることができない。テキストという閉じられた世界であるがゆえに、その作品に現れない形式が、当時本当に存在しなかったのか、それとも存在はしたが作品中に現れないだけなのか検証できないからである。しかし、ここではこうした懸案をいわば括弧に括り、時代を代表する文献資料の様相に基づく観察を時代の様相として提示し、時代ごとの様相の相違を「変化」とみなして仮説を立て、積み重ねた仮説を検証するという方法論を用いることとした。

具体的には、「断り」（何らかの行為要求をされたにもかかわらず、それを拒否する）という場面にスポットを当てて考察した。このとき、現代における「断り」場面において必須ともいえる「詫び」表現（「すみませんが」「申し訳ありませんが」など）に注目した。その結果、中世末までの資料においてはこのような表現は用いられておらず、これが近代語において発達した形式であることが明らかとなった。こうした形式の変化を反映する、対人配慮の「機能」の変化がここにあったものと考えられる。

このような成果は、本科研の中心テーマである語形成と直接的に結びつくものではないが、日本語史を考えるうえにおいては重要な方法論である。「配慮」をキーワードに据えた現代語研究は非常に多く、こうした研究に対して、歴史的観点からの記述は、重要なインパクトを与えるものとなると考えられる。今後もこのような観点からの研究は、さらに進めていきたいと考えている。

(3) 重複という語形成については、古くからの研究の蓄積があり、古代語の実態については概ね記述されている。しかし、そこでは「重複語」という「語」レベルの記述にとどまっているという問題と、重複形式全体を視野に入れた研究がなされていないという問題がある。ここでは、重複形式を「句」レベルを含む「構文」として捉え、個々の形式の特徴に加え、形式全体における位置づけを歴史的な展開の中で行うことを目的とし、詳細に記述することを試みた。

まず、連用形重複（「食べ食べ」など）と終止形重複（「見る見る」など）の歴史について、構文論的観点を交えて分析を行った。終止形重複は、本来持っていた動詞としての

叙述性を失い、重複句から副詞へと変化する。一方の連用形重複は、連用形であるがゆえに主節の述語となることはなく、従属節専用で用いられる。従来指摘されてきた、終止形重複から連用形重複へという歴史の変遷は、従属節という土俵上での終止形重複の変容として捉えられることを述べた。また、「連用形重複+スル」は、「語」と見られることもあったが、「破っては書き破っては書きする」のような形式を視野に入れると、「句」であると把握される。「破っては書き書きする」のような形が現代語では存しないことに鑑みると、重複形式の文法的機能が歴史的に変化したものと考えられる。

さらに「重複構文」という観点からすると、終止形型・連用形型以外にも、「行き行きて」や「笑ひに笑ふ」のように、「テ」や「ニ」が加わった形式も視野に収められる。前者をテ型、後者をニ型と呼ぶと、ニ型の性格は基本的に変化していない。一方のテ型は「飲んで飲んで飲みまくった」のように、形を変えて生産的に使われている。このとき、「VテVテVz」のように用いられる「Vz」は、意味上の主要部が後部要素へと移っていくという、近代語的な性格を示すものとして重要であると考えられる。

このような成果は、動詞語形成の本質に迫るものとして重要である。重複という方法自体は、形を変えながらも古今を通じて常に存在しており、述語でできることは述語でやろうとする日本語の特質を示しているといえる。また、重複形式は文体的な偏りも見られることから、文法と文体の関係を考える際に重要な手掛かりを示すものと考えられる。

(4) 形式名詞の機能語化をめぐる、これからの歴史的研究に何が求められているか展望しながら、語形成論の観点も交えて記述した。

形式名詞が機能語化し、助動詞や接続助詞へ変化するということは、同時に形式名詞を修飾する連体節の性格が変化しているということでもある。「これから飛行機が飛び立つところだ」といった場合、「ところだ」が助動詞化するのに伴い、「飛び立つ」は連体節ではなくなっている。このような「節の脱範疇化」は、古典語の準体節（名詞節）でも同じように起こることは注目に値する。「連体形+ガ+述語」における「ガ」が格助詞から接続助詞へと変わるということは、「ガ」の前部が名詞節ではなくなっていることを示すわけである。そして、このような「節の脱範疇化」は、「連用形+名詞」（＝語）の場合でも、「連体形+名詞」（＝句）の場合と同じように起こりうる。「夏を待ち顔なり」のような形式がそれで、節を「語」の形で表しており、これも一種の脱範疇化を示している

ものと考えることができる。

名詞の機能語化に関するテーマは、近年流行している文法化理論に拠る形で、多くの研究が行われている。しかし、そうした「理論」に用例をあてはめただけの研究も少なからず見られる。本研究は、既存の枠組みにあてはめるだけではない記述方法を提言し、学界へのインパクトを与えた。さらに自身としても、「語形成」からさらに発展するテーマとして、本科研終了後も引き続き研究していくこととなり、キャリアにおける重要な契機となった。

(5) 大学生に向けたテキストとして、あるいは他分野の研究者が当該分野の動向を知るための指南書として、あるいは研究者以外の初学者に向けた一般書として、それぞれにとって有用であると思われる書籍を、共著の形で2冊出版した。

まず、『はじめて学ぶ言語学』は、「言語学お試しセット」として、それぞれの分野の第一人者が「ことばの世界をさぐる」楽しさと奥深さを紹介したものである。16人による共著であり、ここでは歴史的研究の面白さについて述べた。具体的には、可能表現と準体助詞を取り上げ、意味論・語彙論・統語論のあらゆる分野にまたがって平易な解説を心がけた。本書は、すでに4刷を数えており、研究成果を広く社会に還元したものとして、重要な成果を収めたといえる。

もう1点の『ガイドブック 日本語文法史』は、編者の1人として加わったこともあり、内容的にかなり深く関わったものである。日本語文法史研究の基礎的知識から最前線の成果まで、まんべんなく伝えることを目的としている。コラムや文献ガイド、資料解説などの付録も充実しており、好評を博している。出版後1年を経ずに重版が決まっており、こちらも研究成果を広く一般社会に還元したものとして、重要な成果を収めたといえる。同時に、学界内においても、これまでになかった本格的な日本語文法史のテキストであるとして、高い評価を得ている。

(6) 語形成に関するこれまでの研究成果の集大成として、動詞述語を中心とした派生・複合・重複の諸現象について、総316ページを費やして記述を行った。主として中世室町期に考察の基盤を置き、従来の形態論・語彙論の枠組みにとらわれず統語論的・構文論的観点からの分析をできるだけ多く示し、歴史的变化をダイナミックに記述したものである。文献資料の精査によって得られた用例に基づいた実証的な記述に理論的観点から説明を加え、なおかつ方言事象も視野に収めた、日本語文法史研究の新しい試みである。目次は以下の通り。

まえがき

第Ⅰ章 可能動詞の派生

第1節 中世室町期における四段動詞  
の下二段派生

第2節 可能動詞の成立

第3節 四段対下二段の対応関係

第Ⅱ章 カス型動詞の派生

第1節 カス型動詞の派生

第2節 「デカス」の成立

第3節 カス型動詞の消長

第Ⅲ章 動詞の複合

第1節 「～ナス」の構造

第2節 「～キル」の展開

第3節 「～オル」の展開

第Ⅳ章 句の包摂

第1節 中世室町期における「動詞連用  
形+ゴト」構文

第2節 古典語における「句の包摂」

第3節 「～サニ」構文の史的展開

第Ⅴ章 動詞の重複

第1節 終止形重複と連用形重複

第2節 動詞重複構文の展開

参考文献

使用テキスト

あとがき

本書で述べた内容は、すでに国内外の様々な論文で引用されている他、日本語学会の書評にも取り上げられることが決まっている。学界へ与えたインパクトは、きわめて大きいものであるといえる。なお、本書の刊行にあたっては、別途、科研費研究成果公開促進費の交付を受けた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①青木博史，名詞の機能語化—形式名詞を中心の一，『日本語学』29巻11号，明治書院，査読無，pp.40-47，2010年。

②青木博史，近代語における「断り」表現—対人配慮の観点から—，『語文研究』108・109合併号，九州大学，査読無，pp.152-164，2010年。

③青木博史，動詞重複構文の展開，月本雅幸他編『古典語研究の焦点』，武蔵野書院，査読無，pp.203-222，2010年。

④青木博史，動詞重複構文の歴史，『日本語の研究』5巻2号，日本語学会，査読有，pp.1-15，2009年。

⑤青木博史，書評：小田勝著『古代語構文の研究』，『日本語の研究』4巻3号，日本語学会，査読無，pp.127-133，2008年。

⑥青木博史，補助動詞「～オル」の展開，『和漢語文研究』6号，京都府立大学，査読無，pp.89-101，2008年。

[学会発表] (計5件)

①青木博史，述部における名詞節の構造と変化，ワークショップ：日本語における名詞節の脱範疇化，第35回関西言語学会，京都外国語大学，2010年6月26日。

②青木博史，動詞重複構文の展開，平成21年度九州大学国語国文学会，九州大学，2009年6月7日。

③青木博史，動詞の複合に関する一考察—「～まくる」を中心に—，第91回国語語彙史研究会，関西大学，2009年4月25日。

④青木博史，近代語における「断り」表現，日本語コミュニケーションの中の対人配慮，大阪府立大学現代GPシンポジウム，大阪府立大学，2008年8月26日。

⑤青木博史，「～オル(ヨル)」の歴史と方言，ワークショップ：日本語アスペクトの歴史と方言，第33回関西言語学会，大阪樟蔭女子大学，2008年6月7日。

[図書] (計3件)

①青木博史，語形成から見た日本語文法史，ひつじ書房，全316ページ，2010年。

②青木博史・他，高山善行・青木博史編，ガイドブック日本語文法史，ひつじ書房，全213ページ，2010年。

③青木博史・他，大津由紀雄編，はじめて学ぶ言語学，ミネルヴァ書房，第15章ことばの歴史をさぐる，pp.289-305，2009年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

青木 博史 (AOKI Hirofumi)

九州大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：90315929